
真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

光秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜平成の世から来た者〜

【Nコード】

N8479Z

【作者名】

光秀

【あらすじ】

平成の世から恋姫の世界へと降り立った一人の自衛官。この者が織り成す新たな外史の物語。

タイムスリップ（前書き）

これからこの作品を連載させていただく『光秀』です。

確認はしておりますが多少の誤字・脱字等があるかもしれません。それも含め批判、感想、アドバイス等ありましたら言ってやってください。

目指すは完結！

これからこの作品を読んでいただく皆様と長く付き合っていけることを願います。

タイムスリップ

俺は荒野の真ん中に一人立っていた。

まわりはまだ明るく少し暖かい。

東から吹く風が俺の長い髪をたなびかせる。

「此処何処だよ？」

思わずそんな声がこぼれる。

まさかこんな所にいるとは……。たしか俺はさっきまで教官に射撃の訓練を受けていたはずだったんだが。

おそらくというかまあ間違いなく此処は日本じゃないな。こんな地平線が日本にあるはずはないし。

俺は今の状況にかなり困惑していた。

「とりあえず歩くかな。人に会えればどうにかなるだろ」

そうやって俺は歩き出した。特にこれといった目的地もないまま……。

「なんだあれは？」

俺の百メートルぐらい先にはドラマで見るようなカツアゲのシーンが繰り広げられていた。

目を細めてみたところどうやら一人の女性が三人の男共に絡まれているようだった。

俺も普通の人間のためこんな状況を見ればほっておける筈がなかった。

「おい！お前ら」

「ああ！？」

急いでかけよった俺の目の前には左からチビ、長身、デブの順に黄色い服を着た男が立っている。この格好を見た俺はますますここが日本ではないと実感させられる。

おっと。こんな事を考えている場合じゃないんだ。

「死にてえのか！？ああ！？」

いかにも悪者ですと言わんばかりの罵声を俺に浴びせてくる。

シュツ！

「ぐふっ！！」

その声とともに長身の男は自らの腹を抱え、その場に蹲った。その様子を見たチビとデブはあまりの速さに何が起こったのか分かっていなかった。

なぜ長身が地面に蹲っているかというそれは俺がこいつの腹に正拳突きをくらわしたからだ。

俺も自衛官をやっている身なのでそのぐらいは造作も無かった。

一時期は十年に一度の逸材などともてはやされていたがそれは昔の事である。

「十数える間にこの場を立ち去れ。……いち！」

その掛け声とともにデブが長身を背負いチビと一緒に逃げていった。

そして俺は振り返り、さっきまで絡まれていた女性へと声を掛ける。

「大丈夫でしたか？」

「はい。助けていただき有難うございます」

その女性は俺より身長が少し低く、スラッとした印象を覚えた。髪や眉が白くそれに合わせたのか自らの格好も白い装束を身に纏っていた。

それにとっても整った顔立ちをしている。

「いえいえ。礼には及びませんよ。あつ、でも一つだけお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「はい。私ができることでしたら何でもお聞きください」

「じゃあ……此処は何処ですか？」

その質問をぶつけると女性は少し不思議そうにしていた。が、少しすると答えは返ってきた。

「此処は荊州南郡にあります枝江県です」

俺はその返答に少し眉をしかめた。

「少し待っていただけますか？」

「はい……」

俺は少し考えを纏める。

荊州だ？ということとは此処は中国か？いやしかしこの人が適当なことを言っているという事も。

…いやないな。

さっきの男どもやこの辺り一面に広がる荒野を目の前にして俺はその言葉が事実としか思えなかった。

そんな俺に一つの単語が思い浮かぶ。

タイムスリップ

もうそう考えるしかこの状況に説明がつかなかった。

でも俺には何も変わった事は無かった。

俺にはこの不思議な状況に陥る前の記憶は鮮明に残っているがこれといってタイムスリップに繋がると思えるような出来事は一つも無かった。

そもそもタイムスリップってこんなに何の前触れもなくおとずれるものなのか。

「どうかなさいましたか？」

真剣な顔で真剣に悩んでいる俺を見かねたのか女性はそう一言声を掛けてくれた。

「いや。教えてくださり有難うございました」

そう言うと俺は踵を返しその女性の前から立ち去ろうとした。

「待ってください!」

俺は後ろを振り返る。

「何処か行く当てがおりですか?」

「いえ、特には」

俺はそう返事をする。

「もしよろしければ私の屋敷に泊りになりませんか?」

女性は淡々とした口調でそう言った。この申し出は俺にとっては願ったり叶ったりであった。が、俺はそれを断った。

「本当に気にしていただかないで結構ですから」

俺は軽く微笑みそう言う。だが彼女は納得していない様子だった。

「それでは私の気持ちが済まないんです!」

彼女は強い口調でそう言った。その彼女の剣幕と粘りに負けた俺は頷いた。

「それではご厚意に甘えさせていただきます」

俺は頭を下げた。

「頭を上げてください。本来ならこちらが頭を下げなければなら
ないですから」

そう言うとな彼女は深く頭を下げた。

そして頭を上げた彼女は自らの名を名乗った。

だが俺はその名に驚きを隠せなかった。

「私の『馬良』と申します。真名は『魅音』（みおん）です。助け
てくださった貴方にならこの名を預けます」

「!?!」

もしかして、

「馬良……………もしや字を『季常』というのではないだろうか？」

俺はおそろおそろ馬良と名乗る女性に尋ねた。もし俺の考えが正し
ければこの女性はこの質問にイエスと答える筈だ。

そしてそれが意味するのは……

「はい。しかしなぜ私の字を？」

馬良と名乗る女性

見渡す限りの荒野

荊州南郡、枝江県

黄巾を纏った男共

タイムスリップ

多少の違いはあれどこのワードから導き出される答えは一つしかない。

「三国志……」

「えっ？」

此処は三国志の時代なんだ。

俺は表情にこそ出さなかったが確信を持ったその考えに驚いている。黄巾の男。これが黄巾党の奴らなら今は後漢末期ということになる。それに俺の目の前にいる女性、性別は違うが馬良と名乗っている。彼女が馬良ならば彼女の眉が白いのにも合点がいった。

「はあ」

頭をくしゃくしゃ搔きながら俺は溜息をついた。膨大な情報量に今にも頭がパンクしそうだった。

なぜ馬良が襄陽郡ではなく此処にいるのか、なぜ女あのか、などの疑問はまた今度考えることにした。

今考えても思考が追いつかない。

俺は一つ大きな深呼吸をして馬良に言った。

「すまなかった。色々考える事があったものでな。俺の名は『姜維』字は『伯約』だ。これからよろしく頼む」

俺はひとまずそう名乗った。ここが三国志の時代ならば俺の本名は不自然だと思ったからだ。

「あと教えてほしいのだが真名っていうのはなんなんだ？」

俺はこの真名というのに聞き覚えがなかった。

「不思議な事を言うのですね。真名っていうのは心を許した者にしか教えてはならない神聖な名。人によって価値観は違うと思います。が私はそのように認識しております」

この時代にはそんなものがあつたんだな。

馬良、いや『魅音』が俺に真名を預けたということはさっきの言葉通り俺に心を許したという事なのだろう。

「そうか。じゃあ俺も真名を預けるよ『政義』（まさよし）っていうんだ」

魅音は俺が真名を教えると少し驚いていた。

「真名を預けていただけるとは嬉しいです。これからよろしく願いますね」

「ああ」

俺は微笑み手を差し出す。すると魅音も微笑みながら俺の手を握り締める。

この時代にタイムスリップ？してどうなるか分からなかったがひと

まず、のたれ死ぬことは無さそうだ。

俺は安堵しつつ魅音の屋敷へと歩みを進めた。

タイムスリップ（後書き）

「馬氏の五常白眉もつとも良し」といわれる通り馬良は優秀な馬五人兄弟のなかでも特に秀でていたと言われます。

最初なので次も近々更新したいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8479z/>

真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

2011年12月26日20時51分発行